

これからの猪猟

〈8回〉

田宮 治

猪猟の方向性

「人事を尽くして、天命を待つ」
これは人間の力として、できるだけ
だけの努力をし、その結果は運命
にまかせるということである。

今、狩猟界が置かれている境遇
は、まさにそんな大事な時期であ
る。直面するこの難関を乗り越え
るために、私たち獵人が人事を尽
さねばならない大切なことは、未
来まで自信をもって届けられる狩
猟技術や犬芸の確立である。さら
に狩猟道や、生き残り戦略を考え
て万全の対策を立て、きちんと準
備することである。

本来、このような危機的状況の
時こそ、狩猟界で指導的立場で活
躍してこられた獵友会や関係機関
には、さらなる奮起と努力をお願
いしたい。この最大のピンチを最

高のチャンスと捉え、ぜひ行政
(環境省)とトップ会談などを行
っていただき、先頭に立って巻き
返しを図ってもらいたい。

現実的な問題として、今までの
経過をよくよく考えて検証してみ
ると、そんな大願も熱望さえも銃
の危険性を危惧する世間の声と、
一方的に強められる行政の締め付
けの前では、とても太刀打ちなど
できない。しかも、一部の不心得
者の事故で追い打ちをかけてしま
ったのでは仕方のない成り行きな
のかもしれない。

しかし、この結果を、ただ黙っ
て見過ごすだけでは、人生を懸け
て挑戦を続けてきた意義がない。

大好きな伝統狩猟を何としても
守り抜き、この難関(結果)を乗
り越えて堂々と未来まで繋げた
い。そのためには、他人を頼りに
するのではなく、獵人自ら自覚し

狩猟の生き残る道を真剣に考え、
しっかりと準備して、サバイバル
戦略を確立していかなければなら
ないのである。

以前から私は、このような狩猟
界の末期的な時代が到来すること
を予感していた。だから何度も繰
り返して、その対策を本誌に投稿
して警鐘を発信し続けてきたので
ある。

しかし、そんな現場の意見など
が通じるわけもなく、行政の規制
は年ごとに厳しくなるばかりであ
る。獵人の願いは一方的に封じ込
められ、もはや趣味とか楽しむ狩
猟どころか、その存続や生き残る
ことさえままならない最悪の状況
に陥っている。

すべての獵人は、がんじがらめ
で身動きもできない法規制の中
で、どんなに努力して人事を尽そ
うと頑張ったところで、守り抜く

便法や生き残る術などあろうはず
もない。

そして、嫌気がさし狩猟をやめ
てしまったり、お上に物言う元氣
もなくなっているのである。

当然、こんな非常識がまかりと
おる狩猟界に参入して、「火中の
栗を拾う」若者などいない。そん
な状況下で狩猟人口が減少し続け
ているのである。

私は、狩猟人口が減り、たとえ
一人になっても誰にも頼らず、決
められた法はきっちり守った上
で、一人でも大猪が獲れて十分に
楽しい満足できる安心・安全な単
独猪猟の完成を目指して頑張って
きたのである。

それをかなえる単独獵専門の猪
犬軍団、つまり一流犬群の田宮系
猪犬まで完成させて、この難局の
突破を目論んでいるのである。
この目論見の中核にして関東猪

犬猟山彦会を堂々と立ち上げたのは、山彦会を拠点にして支部の拡大を図り、山彦会本来の目的(①猪猟の探求と継承②田宮系猪止め犬と追跡犬ブルーチップの名系保存と継承③猪犬の研究と育成・作出と分譲④良い友、良い犬、良い狩猟、そんな猟心を大切にする楽しい和と新狩猟道の構築と継承)の輪をどんどん広げていくためである。そのために若者や、猪猟人の一人でも多い参加をうながしたのである。

そして、山彦会でなければ体験できない猪猟の素晴らしさや、田宮系猪犬の凄さをすべて実戦の場で押し出し、天下に示していくことである。そのことで、この猪猟

戦術が一人だけでも大猪を撃ち獲れる唯一無二と自負する猪猟であり、さらに田宮系猪犬軍団であることを実戦の中で理解してほしいのである。

私が何度も何度も繰り返して、くどいほど説明しているのは、何事においてもその達成や完成は同じことの繰り返しによるものである。特に単独猪止め犬猟ともなれ

ば、その完成は至難の技である。人それぞれの考えで、単独猟人はどの道をたどって猪犬を特訓して頂点を極めるのか、そこが万人の迷う問題点なのである。

元来、単独猟人は猪猟技術や犬芸の鍛錬に始まり、一番大切な人間形成に至るまで、そのすべてを自分独自の考えで押し進めて完成するのが基本である。

その大切な基本が迷ったり、ぐらついていたのでは、猪猟法である猪犬作りであつても、大変な事態に陥ってしまうのは当然のことである。そして立ち直るまでに、大事な人生の何十年間を棒に振る結果となる。

私がかつて、猪猟道でも猪犬作りでも迷いに迷い失敗に失敗を重ね、人生の大事な歳月を何十年も費やしてきたのだが、せめて山彦会の若者たちにはそんな失敗は絶対にはさせたくない。

超一流の猪止め犬軍団で押し出す猪猟がどれほどのものか実戦の場できっちり確認し、ありのままを残らず体験してもらおう。これにより、真の単独猪猟で、

猪止め犬軍団であると共感し、心から楽しみ頑張ってくれる若者たちを一人でも多く育てたい。そして、他人頼りではなく、自ら率先して山彦会の「即座(そくせき)達人道場」に参加して、この会の特別コースである猪猟の近道に則り、実戦で見聞を広め体験を積み重ねてもらいたい。

このことで、各個人の猪猟技術や人格までも極致まで成長させていく。そして、難関を乗り越えて生き残るために重要であるサバイバル戦略や、私の押し進めているこれからの猪猟を十分に戦い抜き、守り通せる立派な達人に上り詰めてもらいたいのである。

猪猟人がよほどの努力と覚悟を持って人事を尽くさないことにはこの難関を乗り越えるどころか、巻き返すことも生き残ることもできない。ましてや大事な狩猟文化を守り抜き、未来に繋げることなどの大目標も夢のまた夢となってしまう。

私はあくまでも、自ら編み出した猪猟と田宮系猪犬で、目いっぱい実戦で戦い続けることで、一人

でも多くの猪猟人に夢と希望を与え、猪猟の方向性を示し続けることができれば、それで十分だと考えている。

猪猟の常識

ところで、「常識」とは、世間一般の人が共通に持っている、または持っているべきであると考えられる知識や判断力のことである。この歴史的常識も時代の波に押し流され、今や若者たちの概念は大きく変貌を遂げ、もはや常識どころか非常識が堂々とまかりとおる世の中になっていく。

そんな世間の風潮を背景に、猪猟の常識さえもどんどん変化してきている。世間一般の猪猟人が共通に持つ猪猟の知識や判断力は想定外の方向に様変わりしている。

猪猟を押し上げて成長させたり、発展させる肝心の基本概念や歴史的認識、さらに先達からの格言に至るまで時代の流れや行政の締め付けによって、そのままでは使えないものにならない嫌なご時世になってしまった。



一三八⁺の猪をももの見事に撃ち取る。真竹藪の激戦ほど猪犬にとって危険な止め現場はない。これは犬たちが猪の攻撃をかわせないからである。こんな究極の止め現場の体験を重ねることで猪犬は成長し、見事完成するのである。



(中) 二代目クマ号。クマ子号と兄妹犬で、2頭のコンビで仕上げることにしている
(下) 特訓の成果が楽しみな二代目富士号(7カ月)

こんなご時世では、猪猟の王道や猪猟戦略の要である猪大作りの順路など見えてくるわけもなく、その確立や完成はそれこそ至難を極めることなのである。

特に私が入念な計画を基に、独自に考案して実践している成長戦略やサバイバル戦略、さらにこの戦略を完成させるために欠かすことのできない一流猪犬軍団の完成までもが、今までに培った歴史的な猪猟の常識ではどうしても乗り越えられなくなつたのである。

この緊急道義(人の守り行くべき正しい道)としたいのが、前記の条項の克服にある。

この言葉は狩猟界やスポーツ界では言うに及ばず、仕事上や恋愛に至るまで幅広く活用されている。これは簡単明瞭な物事の成功や、難題を解決するための最良の方法として用いられているのである。

私はこの格言を座右の銘とし、行き詰まった時や迷った時、さらには絶望から立ち直るきっかけとなつた時、万事がうまい具合にい

逆転の発想

「押ししても駄目なら引いてみな」。この格言の持つ意味は決して逆転の発想ではないが、どうしても全力で押し通して駄目な時は、その発想を転換して思い切って引いてみる、ということである。

私はこの現状打破こそが、猪猟人すべてが共有する重要な課題で責務であると考えている。

く成功法だと思つてきた。

ところが、猪猟の根源から頂点まで、あらゆる成功や達成を司る大切な歴史的な常識が、時代の流れと行政の締め付けによつて使いものにならなくなった。

このような嫌な時にこそ、私は即座に「常識が駄目なら、非常識でやってみな」と発信したのである。

ここで活用する非常識とは、歴史的な猪猟の常識を覆した超非常識のことであり、これからの猪猟を押し進めて完成する上でなくてはならない逆転の発想である。

では、なぜこのような発想が必要なのか。その問題点となるのは狩猟界の独特な実践環境の中に存在する。どんなに努力したところで、誰もこの境遇からたやすく抜け出すことはできない。

本来、猪猟（狩猟）とは、山中の険しい猟場で猪猟人と犬たちだけで実践するのが大原則である。そうした特性からどんな大グループで猪猟を実践する場合でも、実践を検証して正しく判定する審判員もいなければ、猪猟を盛り上

げ、激戦を賛え元気づけてくれる観客もいないのである。

当然、猪猟人はルールを守り、「戦術」も「猪犬芸」においても、実践の場で自ら検証して、善悪をきつちりと判断した上で正しい判定を下さなければならぬ。

猪猟を押し上げて、成長し発展させる大事なマナー作りや常識は、猪猟人がそれぞれの立場で立案していく。そして、長い年月をかけた独自の努力と挑戦によつて学び取つて、築き上げたものが猪猟人独自の個別な知識や判断力（常識）なのである。

猪猟を掘り下げて考えれば分かるように、本来の猪猟は人類が生きるための食糧調達に絶対に必要なものであつた。

それが時代の流れとともに、食文化や生活様式が様変わりして、「森の番人」としての存在自体が揺らぎ始めたのである。そして、猪猟は絶対に必要で、社会からも望まれるものではなくなつてしまつたのである。

こんな状況では、猟人がどんなに努力して壮大な目標を掲げ、人

生を懸けて頑張つても、日本一のチャンピオン（人、犬ともに）や一流プロへの道はなく、世界に羽ばたく大舞台など夢のまた夢なのである。

それどころか、猪猟が社会から望まれたものでなくなつたことから、行政の締め付けが強まつていく一方である。猪猟を活気づけ成長させる対策や援助は全くない。

ただ一人の猪猟人ごときが「やれ巻き返しだ」「逆転の発想だ」と叫んだところで、猪猟の永久不変の常識や猪猟の王道など構築できるものでもない。

現実的な問題として、猪猟でも犬舎でも、一生懸命になつてやればやるほど大赤字となり、経済的見地からいえばよほどの猪猟キチか、経済音痴でもないかぎりともやつてはられないのが実情である。

こんな八方塞がりの中で、猪猟復活を望むのであれば、にわか仕込みの机上の理論や未熟な猪猟の既存概念を振りかざして、猪猟法や仔犬選びを論評したところで、これからの猪猟の底上げや仔犬選

びの改善に繋がるわけもない。ただいたずらに猪猟人の心を迷わすだけである。

こうした状況下の狩猟界を守り抜き、生き残ろうといふのであれば、押し出す猟法も押し進める論評も、すべて実践し体験を重ねて会得した戦術であつたり、自信を持っている独自の一流犬作りでなければならぬ。

どの道をたどつて頂点を極めるにしても、これからの猪猟は生やさしいものではなく、極限の中の挑戦となるだろう。

すべての猪猟人が忘れてならない要点は、常識を超えた全く新しい独自の発想を身に付けることである。その独自の発想を基に今までの猪猟の概念を転換させ、自ら猪道を突き進み完成させることである。

雑念を捨て、自らが信じるこれからの猪猟の第一歩を踏み出す時である。その夢（目標）は当然、自分が切り拓いて咲かす超一流の独自猪猟道の完成であり、自分の生涯を飾るとびっきりの道楽作りなのである。

（つづく）